



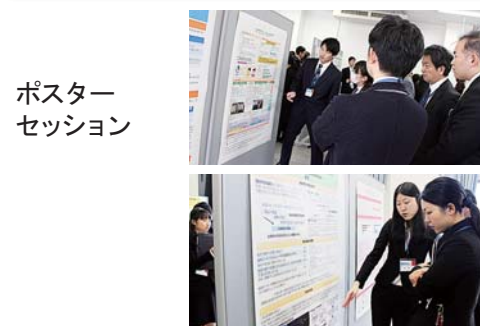
教育実践研究フォーラム in 長崎大学 (11月11-12日開催)



本年度のフォーラムは、昨年度に引き続き「新しい時代の教育実践をめぐって」をテーマに、1日目に「実践研究長崎ラウンドテーブル」を2日目に「教育実践と省察のコミュニティ」を開催した。大学院生のポスター発表は31件、附属学校・学部教員の研究発表は29件あり、参加者数は215名(のべ429名)であった。シンポジウムでは、教育現場のニーズの高い道徳教育に関わるテーマを取り上げ、講演・協議を行い、今日的な教育課題に関する治験を深める有意義な機会となった。

【プログラム】

- 11月11日(土) 13:00~16:30 実践研究 長崎ラウンドテーブル(教育実践を少人数グループで話し合う探求の場)
11月12日(日) 教育実践と省察のコミュニティ 2017 テーマ「新しい時代の教育実践をめぐって」
9:00~10:30 教職大学院生のポスターセッション
10:40~11:25 教育学部教員、附属学校教員、研究協力教員等のポスターセッション
11:40~12:45 院生によるポスターセッションを受けての総括
13:30~16:00 シンポジウム「これからの道徳教育について、考え、議論する」
「特別の教科 道徳」の完全実施に向けて-シンポジウム
松下良平氏(武庫川女子大学文学部教育学科教授)、服部敬一氏(大阪市立豊臣小学校校長)
指定討論者 山岸賢一郎氏(長崎大学教育学部准教授)



ポスターセッション

子ども理解-特別支援教育実践コース 石田 早季
ポスターセッションは、自分の実践研究との結びつきが期待されるものを中心に、附属学校の先生方や、他専攻・他校種の先輩方の実践研究も聞くことができる。大変貴重な機会となった。発表を受けて、実際に、自分の実習校での授業に取り入れようとした活動もあるなど実践研究も多くなり、将来現場に出たときのために興味深く聞くことができた。来年度、自分が発表者となった際には、今回の先生方、先輩方のように参加者にとっても実りのある発表ができるよう、今後の実践研究に取り組んでいきたい。

子ども理解-特別支援教育実践コース 本多 利衣
ポスターセッションでは、現代の教育課題を踏まえた様々な視点からの実践研究を見ることができ、とても勉強になった。どの発表にも現場に寄り添っただけでなく、様々な校種の専門性を持った方が集まって、お互いに意見交換できる場がもたらされている。そのため、研究についてより多面的な視点を考えることができ、考えが深まる時間となった。さらに、自分自身の研究につながる実践報告についても学ぶことができ、新たな課題が見つかる有意義な時間となった。この時間の学びを、これからの実践研究に活かしていきたい。

ポスターセッションの総括

子ども理解-特別支援教育実践コース 平野 晶子
実習1-5での実践を重点的に踏まえたポスター発表を聴き、現場での多様なケースに合わせた研究の深め方を学ぶことができた。どの発表にも現場に寄り添ったという点では共通している部分があり、自身の研究に対する視点や疑問を返すことができた。講演があったように、実践研究をどのように位置づけるかは、自分自身が常に意識する必要がある。座学での学びが現場の必要性に応じてアレンジをし、実践するにできる教育大学院生の強みを最大限に活かし、新たな視点の一つとして現場に還元できるように努力していきたい。



シンポジウム

子ども理解-特別支援教育実践コース 須崎 美也子
ポスターセッションの総括では、附属小・中学校の先生方と実践研究の先生方、東京芸大の渡辺先生よりお話を伺った。校長先生からは、実践研究の取組や子どもについて個別の内容について具体的に話を伺った。これからの研究をどのように進めるかについて、先生方からアドバイスをいただいた。自分の研究を明確にし、ぶれないようにという言葉が印象に残った。この言葉を心にとめて実習に臨みたいと思う。

子ども理解-特別支援教育実践コース 下田 のり子
平成30年度より、小学校では「特別の教科 道徳」が全面実施され、「考え議論する道徳」の授業が求められる。これまでの道徳の授業は、子どもたちが関心を持っていることを尋ね、「教師が求める答え」を探求していった。しかしこれからの道徳は、子どもたちが一歩先のことや議論できる問いを、教師が立てることが必要だと学んだ。表面的ではなく、価値観について子どもたちがしっかりと考え、その子ならではの「道徳観」を見つけていけるような授業を行うことが必要だと学んだ。今回の授業を振り返るようこれからも学びを深めていきたい。

子ども理解-特別支援教育実践コース 兼 祥子
今後の道徳の教科化に向けて、道徳という教科で何を教えるべきか、何を指導すべきかについて議論を交わしながら考えることができた。道徳とは、一般的なこと、わかっていることを確認する授業ではなく、いろんな角度から問題を捉え、わかたううえで、その先を考える授業を教師は考えたい必要がある。そして、道徳とはこうだと伝えることができるものではなく、様々な形がある道徳であるため、教師自身が児童や時代の変化に合わせて柔軟に展開していくものだと思えることができた。

学級経営-授業実践開発コース 田村 健太郎
ポスターセッションには教育学研究科の教職員や学生だけでなく、教育に携わる多くの方が参加されていた。今回は参加者としてこの場に立てたことで、会場での熱意の高さに圧倒されていた。そんな中で発表者の方へ質問したり、そこで行われた議論に参加する中で多くの学びが生まれた。来年度は私も発表者としてこの場に立つこととなる。来年度も今回のように参加者として学びを深められるような場を作りたい。そのためにも今回の学びを活かして、来年度のこの場が良い発表ができるように自身の研究に取り組んでいきたい。

学級経営-授業実践開発コース 朝倉 諒
実践研究ポスター発表では、教職大学院生や附属学校教員等による実践研究の報告が行われた。発表者の報告に対して、質問者が意見を述べ議論が行われた。参加者には教育に携わる様々な立場の方が参加した。質問者だけでなく、そのほかの参加者も随時意見をお互いにお互い交換することで、深い議論の場となった。ポスター発表では、発表者と観覧者が近くで直接面と向かって対話できる。お互いに対話を繰り返していくことで、実際の現場が抱えている教育の課題について多面的・多角的に議論ができ、また、本気で語り合える場であった。

学級経営-授業実践開発コース 中俣 浪漫
ポスター発表の総括では先生方による発表へのアドバイスを、先生方から発表者へ向けられた助言を具体的に聞くことが出来たため、自分が発表者としてポスター発表をしたときの参考にしたいと思う。また、先生方が発表者に対して「参考にになりました」といってくださったこと、先生方もまだ学校現場という熱い思いで発表をお聞きになっていたのを感じた。それにより私も2年後のようなまなざしを投げかけた発表をしたいと思うと、私自身も先生方の姿勢を見習って学びたいと決意を新たにすることが出来た。

学級経営-授業実践開発コース 山口 大樹
東京芸大の渡辺先生の講演の中で、実践研究とは何かについて考えた。実践には、児童自身に付き添った「狙い」や「問い」があるが、研究にはなぜそれを行うのかの「問い」が必要である。実践研究を進めるに当たって、狙いが達成されたかどうかだけでなく、その実践が狙いを達成する以外にどのような効果があったのか、実践を行うことで気づく発見が何だったのかを実践報告としてまとめたいという思いを込めて実践報告をしていきたい。私自身日常生活を含め学校生活の中で、当たり前になっていることに関心し直すことからも新たな発見をしていきたい。

学級経営-授業実践開発コース 大石 溪
今回のシンポジウムで、道徳の時間は表面的なだけを進める時間ではなく、子どもが物事の本質を考え、議論できる時間にならなければならないと思った。そのために、道徳の授業では子どもにその物事がなぜいのか、なぜ悪いのかを多様な角度から考えさせたい。また、まずは教師として自分が普通の生活の中から道徳について考え、授業を行う中で子どもと議論していく必要があると感じた。そうすることで、実際の生活現場で子どもは状況に応じた判断ができるようになり、45分間の道徳の授業を大切にしたい。多面的・多角的な視点から授業づくりを行ってみたい。

学級経営-授業実践開発コース 矢島 佑樹
本日、松下先生、服部先生から道徳について何を「考え、議論する」のか、何を指導すべきかについて議論を聞くことができた。道徳とは、一般的なこと、わかっていることを確認する授業ではなく、いろんな角度から問題を捉え、わかたううえで、その先を考える授業を教師は考えたい必要がある。そして、道徳とはこうだと伝えることができるものではなく、様々な形がある道徳であるため、教師自身が児童や時代の変化に合わせて柔軟に展開していくものだと思えることができた。

教科授業実践コース 石橋 菜々子
院生の先輩方や現場の先生方のポスター発表を聞いて、どんな風に研究に取り組んでいるのか(研究の進め方)を知ることができ、私自身の今後の実践研究の方向性を知ることができた。また、自分が発表者として発表を自由にできる環境や発表者と参加者の距離も近いので、加わったことになった研究の内容について理解を深めることができた。さらに、色々な発表者の中で自分が知らないことを知ることができ、多くの学びがあった。今回のポスター発表を通して得た学びを活かして、今後の実践研究を行ってみたい。

教科授業実践コース 小洞 琢己
この度、長崎大学教育学研究科において開催されたポスターセッションは、普段あまり目にするような様々な領域の研究をオープンな環境の中で話し合うことでこれまでになく知見を得るとともに有意義な時間であった。研究は実践の手法からシステム、情報機器を生かした実践など多岐に渡り、改めて実践研究の幅広さを確認すると共に、来年度は私が発表する立場であるため、昨年度と今年度のポスター発表に参加した経験を活かし、今後の研究に取り組んでいきたいという感想を抱いた。

教科授業実践コース 江川 采奈
今回のポスターセッションの総括を拝読し今後のように研究を進めていこうかと、考えるきっかけとなった。なかでも、渡辺先生が話された「問いを持つ」ということが大切であることに改めて気づかされた。本日に書かれていることがすべて正確でなく自分自身、実習を通して実際に感じたものを素直に表現していきたいと感じた。今後の実習では生徒の発言や行動などに対して「なぜ」という疑問を持ち取組んでいきたい。そのためには、周との意見交換を大切にしたい。多くの方と交流する機会を充実させていきたい。

教科授業実践コース 八尋 慶一郎
総括では改めて教育実践研究の奥深さを感じることができた。私は先輩方のポスターセッションを聞いて、ただただ感心するばかりだった。しかしコメントしていただいた先生方は必ず「教育の現場というリアルな現場」を踏まえていた。新しい教え方を見つけ、成果が出たら、全員がその教え方を実践すればいいというわけではない。私は3年プログラムのなかでまだ研究のイメージは定かでない。なぜ、この研究をするのか、この研究はどのようなことなのかを、研究を行う際に成果を見ることができ、この研究がどのようなことに活かせるのかを考えた。この研究がどのようなことに活かせるのかを考えた。

教科授業実践コース 佐田 彩佳
平成30年度から小学校、31年度から中学校の特別の教科「道徳」の完全実施に向けて、今回のシンポジウムは今後の道徳の授業の在り方を知りたいと感じていくべきかを考えるきっかけとなるものがあった。「考え、議論する道徳」の授業を聞かせるにあたり、教師は子ども達に「何を」問い、考えさせることができる教材選択を行うべきであると認識した。道徳の授業を通して、実生活で自分自身を見つめると、また、物事を多面的・多角的に考えることを意識していきよう。子ども達と共に将来教師になる自分も学び続けたい。

教科授業実践コース 本木 和幸
学校全体で行われる道徳教育と道徳科はどう違うのかという疑問を持ち、講演に臨んだ。学校全体で行われる道徳教育では「問い」を重視し学び、道徳科ではなぜ悪いのか、なぜいいのかが、二項対立でないものを深く考え、学ぶという学習の場を大切にしたい。道徳科の授業においては、内容の考えを深めたいだけでなく、話し合うことを目的として意見を出しているときがあるという意見を受け、道徳を教員として行う意義と、目的意識を教師が持つことの必要性について深く考えることができた。これから道徳科に対する理解を深めることで、学校全体で行われる道徳教育の目的や意義を常に考えていきたい。